東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

第9回アスリート委員会

日時：平成30年1月29日（月）15時00分～16時45分

場所：虎ノ門ヒルズ森タワー9階　会議室TOKYO

○高橋委員長　ただいまから、第9回アスリート委員会を開会いたします。

2018年の最初のアスリート委員会で、皆様、お忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。

委員長の高橋尚子です。どうぞよろしくお願いいたします。

2018年ということで、東京オリンピック・パラリンピックまで、残すところ、もう2年半となってしまいました。1,000日前イベントなども終わって、カウントダウンに迫ってきている、そんな感じがいたします。

現アスリートの皆さんというのは、もう、今の時期、東京を目指して全力を尽くして取り組んでいるところだと思いますが、このアスリート委員会も、いま一度、もう一度、一つになって東京に向かってまいりたいと思いますので、ぜひ、皆さん、よろしくお願いいたします。

さて、今日の委員会もですけれども、記者の方にはフルオープンとさせていただきたいと思います。また、ムービー、スチールの方は、これまで同様に、会議の冒頭のみのオープンとさせていただくこととなります。御了承いただきたいと思います。

それでは、開会に当たりまして、森会長から一言御挨拶のほど、よろしくお願いいたします。

○森会長　それでは、座ったままで。

御多用の中、しかも今日はとても寒い日でしたけども、御熱心に御参加をいただきまして、ありがとうございます。

今、高橋委員長からもお話がありましたように、もう皆さんの心は平昌に飛んでいるようでありまして、この組織委員会の仲間、約1,000人を――この事務所は四つに分かれているんですけど、1,200人ぐらいおりますが、みんな気持ちは平昌のほうにみんな行っておるようであります。

しかし、私はいつも言うんです。組織委員会は別にアスリートと一緒に走るわけでもな

いし、要は東京オリンピックの準備をする、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの準備をする。会場整備はもちろんのことでありますけども、東京都及び関係自治体との調整、あるいは多くのお客さんたちが、どうやって皆さんが十分に喜んで、東京にまで来られて見学していただけるか、応援をしていただけるか、あるいは選手や役員の皆さんがどうやったらうまく移動ができて、時間内に全てがうまく進んでいくか、そうしたことの万全、予期せざることはたくさんあると思います。特にセキュリティの問題、サイバーの問題、よく暑さのことも指摘されます。そういう問題を、みんな真剣に、それぞれですね、副総長が先頭になって、各局長、懸命な努力を今いたしております。選手村の食事もそうですね。これは皆さんもよく御存じのとおりでありまして、そういうようなことも含めて、大変、準備をすることが組織委員会の仕事でありまして、平昌で一緒に騒ぐのは我々の立場ではないということです。

ただ、お隣で平昌のオリンピックをやられる、そして前のリオもある、あるいはロンドンもある、ソチもあるというような、そういうものを見ながら、その経験を生かして、そして、先ほど申し上げたような事柄などを立派に仕上げていくということが大事かなと、こう思っておりますので、そういう角度で、このアスリート委員会の皆さんにも、時に適切な、現場のことが一番よくおわかりの皆さんでありますので、御指導を賜ればというふうに思っております。

平昌では、いよいよ聖火リレーが盛り上がっておりますし、私どものほうの聖火のコースといいますか、これも聖火委員会でやっておりまして、今年の春から夏ごろにかけては、大体、どこをどういうふうに走るかということも、そろそろ具体的な作業に入ってくることになるかと思います。

それから、大変、暮れから正月にかけて人気を博したのは、子どもたちにマスコットを選んでもらうという、これは世界中、また歴史的にも、オリンピックで小学生の子どもたちが決めたというのは、どこにもなかったアイデアでありますが、これは担当委員会の皆さんの発案でできたことで、今、もう既に、小学校2万校ございます中で、1万4,000校にも達しておるそうでありまして、いよいよ2月22日でしたかに決定をいたしますが、全国の子どもたちがどのような考え方を示してくれるか、非常に興味深いものがございます。

それから、また今年はボランティアの実は募集を始めなければなりません。そのいろんな準備も今いたしております。8万人ぐらいということになりますが、どの程度、どういうようにしてやるのか、僕らも皆目見当がつきませんが、担当の皆さんは、もう既にその

仕事に着手をいたしております。

さて、東京都、震災被災地でのライブサイトが立ち上がっておりまして、今日の御出席の及川委員が現地に行かれて、実際にリレーを走られるというように伺っております。河合副委員長、田口委員、池田委員も、ライブサイトに出演されるというふうに伺っておりますが、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

これまで委員の皆さんに関わっていただいております、東京2020参画プログラムでありますが、全国の参加人数が1,000万人、参加団体が1,000団体を超えました。今年はますます拡大して、裾野を広げていくことになります。ぜひ、こちらへの協力も、アスリート委員自身の参加のみならず、協議団体と一緒になった企画展開をお願いしたいと思います。

大会まで、もう900日余りということになりました。今年の夏には、先ほど申し上げたマスコットの発表、ボランティアのこと、それからチケットの販売という問題も出てまいります。大会に直結するような問題がたくさんございまして、国民の皆さんにも大いに関心を寄せていただけるテーマに入ってくるかと思いますが、どうぞ、ますます皆さんの御指導、御鞭撻をいただきますようにというふうに思います。

いよいよであります。今、委員長から申されたとおりの指示で進めてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

○高橋委員長　森会長、ありがとうございました。

それでは、恐れ入りますが、ムービーとスチールの方は御退室いただきますよう、よろしくお願いいたします。

（プレス　退室）

○高橋委員長　皆さんのほうは、お手元の議事次第のほうを御確認ください。

それでは、これより議事に入っていきたいと思います。本日の議題は五つとなります。

まずは、アスリート委員会が関係する大会エンゲージメントの活動について、御報告させていただきます。

それでは、アスリート委員会が関係する活動について、まずは私から活動の状況と今後の活動予定について御説明をさせていただきます。

まず、資料1を御覧ください。

8月に行われたパナソニック東京センターの東京でのイベントの報告です。河合副委員長、また、関根委員が、ボッチャスポーツ体験をトークセッションとともに行いました。

河合副委員長、子どもたちとどのようにゲームを楽しまれたか、感想をお願いしてもい

いですか。

○河合副委員長　実際に、海外の方もいらしている中で、子どもたちと一緒に楽しくボッチャをするのと同時に、結局、どういうふうに投げるとか、投げる順番を決めたりとか、とても親睦を深めて交流できる、いいプログラムになっていたなというふうに思っております。日本の子どもさんたちも一緒に参加いただいたので、国際交流と、またスポーツをつなぐということも含めて、新しい取組ができたんじゃないかなと思っております。

以上です。

○高橋委員長　このような形で、前回、7月の委員会以降、ワーキンググループ1の活動をこれからざざっと皆さんに報告をしていただきたいと思います。

続いて、東京2020オリンピック・パラリンピック、1,000日前イベントの一環として、豊洲で行われたイベントがあります。「豊洲ユニバーサルフェスタ　－みんなのチャレンジ！－」ということで、齋藤委員、河合副委員長、池田委員、関根委員、不老委員が、ボッチャのトークセッションを行っていただきました。

写真もついておりますが、齋藤委員は、「子ども記者体験」の様子、どのような形でしたか。

○齋藤委員　子どもたちとともに、車椅子に乗ったりだとか、義足の体験を行ったり、普段できないような体験をする中で、ユニバーサルとはどういうものなのかということを体験するというイベントでした。

私自身もいろんな気づきがあったんですが、中でも、子どもは、一緒に参加をしていた東京ガス所属の競泳のパラリンピアンである木村選手、「すごいね」というふうに言ってきたんですね。私は「そうだね、メダルもとってすごいね」というふうに話をしたら、「違うよ、目が見えないのにサイン書いているよ」っていうふうに教えてくれたんですね。その中から、すごくいろんなことを私自身気づかされました。そういう小さなものが大きなレガシーになっていくんじゃないかなというふうに感じたイベントでした。

○高橋委員長　ありがとうございます。

もう一人お聞きしたいと思いますが、池田委員、子どもたちと行った、パラリンピック体験をされたそうですけれども、いかがでした。

○池田委員　そうですね、車椅子のバスケを一緒にしたんですけども、やはり普段のバスケの競技とは違っていて、子どもたちと一緒に体験するということと、一緒のグループになってスポーツ体験をしたりとか、DNPの視覚障害の点字だとか、見え方だとかというよ

うなブースを回りながら、いろいろ子どもたちと一緒に体験できたのが、非常にいい経験だったなというふうには非常に感じています。

子どもたちも、やっぱりただブースを回るだけではなくて、体を動かして、その後ブースを回ったり、非常に子どもたちが興味を持っていけるような動線づくりだったのかなと思っていて、非常に僕自身も学びになったし、子どもたちも最後まで本当に飽きずに、楽しみながらチャレンジできていたのが印象的でした。

○高橋委員長　また、こうやってアスリートの皆さんと関わることで、選手たちも身近に感じてもらえていると思います。

続いて5ページになりますが、オリンピック・パラリンピック特設ブース東京2020大会、1,000日前ということで、1000Days to Go！「さぁ、集まろうぜ。」という、そういったイベントです。

東京国際フォーラムで行われましたが、河合副委員長、また、上山委員がトークショーとトランポリンデモを行っていただいたんですよね。もう写真を見てもわかるように、上山委員、飛んでいる姿がありますけれども、周りの皆さんは驚かれたんじゃないですか。

○上山委員　そうですね、やっぱりまだまだトランポリンという競技をまだ御存じのない方が多い中で、国際フォーラムで飛ばせていただいて、NECの関係者の皆様方にも、すごくトランポリンというものを身近に感じていただきましたし、イベント終了後、飛んでみたいというふうにおっしゃってくださった方々も多かったので、その場でトランポリンというものを披露できたのは、すごく僕自身としても光栄に思いました。

○高橋委員長　NECの方々に後で聞いても、やっぱり試合会場に行かないと見えないものをやはり間近で見られたこと、また、まだあまりトランポリンを知らない人にも、しっかりとその競技を知ってもらえるような、そんなきっかけになっているのかなというふうにもおっしゃっていましたね。

河合副委員長はトークショーに御参加ということでしたけれども、その様子はいかがでしたか。

○河合副委員長　トークで話をさせていただく時間をとって、NECの方がコーディネートしていただいて、いろんな質問に答えていくような形でお話をしました。メダルも持っていったので、その後、終わってから一緒に写真を撮ったりとか、そういう形で盛り上がりましたけれども、上山さんに全部持っていかなれたなという感じでした。

以上です。

○高橋委員長　続いてまいります。

6ページ、1000日前だ。キャンペーンということで、「さぁ、スポーツで集まろうぜ。」、11月24日にパートナー企業とともに行ったイベントです。

これは私と田口委員が参加をさせてもらったんですけれども、2年半後の東京オリンピック・パラリンピックが終わった後に、少しでも多くのスポーツをやる人たちを増やしていきたい、単発のイベントではなくて、これはこれからもできるだけ定期的に、会社の皆さん、企業の皆さんと連携し合って、どんどん習慣的にスポーツをその企業に残していき、データを調べながら、2年半後に、自然とスポーツ人口が増やしていけられるような形で進めていくといった、第1回の企画でもあります。

ということで、このときは200人近くの方々が集まっていただいて、一緒にランニングをしたり、また、スポーツのことを話したりしたんですけれども、本当、これはワーキンググループでお話を受けて、アスリート委員会と企業の方々で話し合って、具体的な形が、ようやく形になったというようなイベントでした。

田口委員は、ボランティアで、走っている人たちを応援する、応援をこれから、先ほど森会長もおっしゃいましたけど、ボランティアといったところも非常に大切な視点ですので、そういったことを皆さんに知っていただくような形で参加をされたと思うんですけれども、いかがでした。

○田口委員　私は応援のほうに回ったんですけども、このときは5個のチームに分かれて、順次1本ずつずらせて、高橋委員とどんどん皆さん走っていかれるというところ、そこを私は一定のところの場所で皆さんを応援したり、5、6人の方々ですかね、NECの方、応援していたんですけど、最後は、5周終わった後ですね、自然とゴールになった人からどんどんアーチをつくっていって、最後までみんながハイタッチしていく。走った人も、参加した人も、みんながハイタッチしていくって、何か自然に盛り上がっていって、ああ、こういう雰囲気がもっともっとつくっていけたらいいなというふうに思いました。

○高橋委員長　そして、資料の下のところに話し合っているワーキングショップの姿もありますけれども、こういった形で、企画して出た三つのイベントを今までに行いました。7月には田口委員が社内のワークショップに参加をし、11月初旬には上山委員が特設ブースで行ったトランポリン、そして11月の中旬には、不老さん、齋藤委員、2人がボッチャの体験に参加をするといった形で、形になってきたものが多いということもぜひ知っていただきたいと思います。

さあ、そして今後の主な活動予定のほうも御報告させていただきたいと思います。

続いて、8ページになります。オリンピアン・パラリンピアンによる講演＆パラスポーツ体験ということで、アスリート委員とパートナー企業が一緒に企画をしているイベントです。パラリンピックスポーツを体験しながら、楽しみながら理解を深めていく。

不老委員は以前にも御参加をしてくだったということでしたけれども、そのときの様子はどのような感じでしたか。

○不老委員　NECの本社で、ボッチャ体験、イベントに参加したんですが、非常にその体験がよかったもので、地方でもやりましょうよということで、福岡企画を行ったわけでございますけれども、実は福岡県、福岡市にも中に入っていただいて、2月23日にボッチャイベントをやるようにいたしました。

○高橋委員長　ありがとうございます。

さあ、そして続いてのページをめくっていただきまして、アスリート・スペシャル・トークセッション2018「違いを乗り越えて一つに」ということで、こちらはアスリート委員と東京マラソン財団とともに企画をしている一つのイベントですね。これは去年、一昨年から続くステージイベントとなっていまして、今回で3回目となります。

そこで、今まではステージに、東京マラソンのところでオリンピック・パラリンピック、ほかの競技ももっともっと知ってもらおうということで、一番最初にアスリート委員会を立ち上げたところから、みんなの希望を聞きながら始めた、そんな継続しているイベントだと思うんですけれども、今までは、参加をした人に任せていて、報告を受けるような形だったと思うんですけれども、これから少し、この企画とともに、アスリート委員会の考え方を少し変えていきたいと思っております。2年半後の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、参画プログラムであったり、フラッグツアー、続いていくような形で、みんなで意見を出し合いながら、どんなことを――例えば東京マラソンのところのステージでしたら、よりオリンピック・パラリンピックを楽しんでもらえるのかということを、意見を出して、そのステージの中身を皆さんで考えながら、最終的に行っていただく河合さんや田口さんに、その企画を託すような形で、みんなでステージをつくるという気持ちを持ちたいと思っています。

なので、今日、アスリート委員会が終わりました後に、30分ほどお時間を皆さんにいただきまして、ワーキンググループ1の活動を少し進めさせていただきたいと思います。この東京マラソンだけではなく、そのような形で次につながる提案を幾つかさせていただい

て、もっともっと参画プログラムや、また、NFなんかと一緒にやるようなイベントも、みんなの意見を出しながら、現地に行かなくてもアスリートの意見をしっかりと注入できるような形で、関わっていくような形をこれからはとりたいと思いますので、そういった参加の仕方ということを皆さんにもしていただきたいというふうに思います。

それと関係してくる大会にもなってはくるんですけれども、その次のページになります。やまなし大運動会2018。こちらは、萩原委員が企画した、山梨を盛り上げるイベントになります。山梨にゆかりのあるアスリートと、さまざまな体験ができるイベントということで、萩原委員、昨年も行かれたというふうにお聞きしていますけれども、そのときはどんな様子でしたか。

○萩原（智）委員　ごめんなさい。今回が初めてになります。

○高橋委員長　今回が初めなんですね。すみません。

これを今まで、じゃあ、萩原さんが一緒になって計画を立てて、そして、この第1回につなげてきたということですね。

○萩原（智）委員　そうですね。ちょうど昨年の今ごろに、企業の山梨トヨペットさんの髙野社長にお会いをしたときに、たまたま私がこういう構想を持っていてやってみたいとお話をしたら、じゃあ、ぜひ一緒にやりましょうということで始まりました。地元ゆかりのトップアスリートに声をかけたら、すぐに皆さんがやりましょうということで力になってくださったので、いい形で進んでいると思います。3月ということで、まだ終わっていません。公認プログラムにすると、結構制限があります。ただ、地方の企業さんも結構そういうことをやりたがっています。情報を知らないということもやっぱり多くて、今回、トヨペットさんが、こういう公認プログラムにできたということをすごく喜んでいらっしゃるので、いい形でやっていきたいなというふうに思っています。今後は、大人向けにも企画をどんどん考えていきたいなというふうに思っています。

地元のオリンピアンやパラリンピアンが盛り上げるということを考えていきたいです。アスリートファーストという言葉がありますけども、アスリートを第一にはもちろんで、もう一つ私は意味があると思っていて、アスリートがトップランナーとして走って地域を盛り上げなきゃいけないかなというふうに思っています。ここまで運営で関わっていて、結構大変だったんですけど、そういうものもありますので、もし何か地方でこういうことをしたいという場合は、御相談いただければ、相談には乗ります。ぜひ地元を盛り上げていただければと思います。

○高橋委員長　萩原委員が地元の人たちと意見を交わして一つのイベントをつくられる、また、不老委員が福岡のほうでボッチャの大会を開催されるといったように、皆さんのところの周りでも、一緒に参画プロジェクトに参加をされる、そんなきっかけもあると思いますので、今のような形で、もし、地域の方であれば萩原さんに、また企業の方であれば不老さんにといったような、経験を皆さんが共有し合いながら、もっともっと広げていければいいなというふうに感じております。

さあ、続いては東京2020オリンピック・パラリンピックのフラッグツアーについて、事務局のほうから説明をお願いいたします。

○小林部長　フラッグツアーにつきまして、御説明をさせていただきます。

今までお話を頂戴しましたとおり、アスリート委員の皆さんには、エンゲージメント活動、多大なる御協力をいただきましたこと、この場をかりて御礼を申し上げますとともに、今日は、引き続き、まだフラッグツアー、これからも続いていきますので、引き続きの御協力をお願いしたいということで参りました。

資料12ページになりますけれども、フラッグツアー、オリンピックとパラリンピックの旗、リオ大会から引き継ぎまして、東京都内を一巡させた後、被災地、そして昨年の7月からは全国を回っております。12ページの下のほうにございますけども、まず、フラッグ歓迎イベントということで、それぞれの自治体の代表の方にフラッグを引き渡しをするということで、これは写真はちょっと見にくいんですけれども、遠藤会長代行にも、これは山形にお運びいただきまして、吉村知事にお渡しをしたと。それから、鈴木大臣にも当日御出席をいただきました。それから、県内巡回、概ね1カ月程度、公共施設等を回してまいります。その間に、一番右にございます小中学校訪問イベントということで、子どもたちに、フラッグに触れ合っていただく機会を創出しようということで、ここに多くアスリートの皆さんに御協力をいただいております。

その内容につきましては、次の13ページに記載がございます。学校イベント、各県1校になりますけれども、フラッグを持っていきまして、フラッグ引継ぎセレモニー・講演ということで、校長先生ですとか、教育委員会の方に、フラッグをお渡しをし、アスリートの皆さんから、それぞれの体験談、自身のアスリートとしての頑張ってきたこと、それから仲間やいろんな方に支えられたことなどを子どもたちに語りかけていただくと。また、子どもからはいろんな質問が飛んでまいりますけれども、そこにもお答えいただいて、そういったセレモニーを実施するとともに、給食交流イベントとして、一緒に給食を食べて

いただいたり、それぞれ、実技ということで、それぞれの競技に関連したような活動、体を動かすといったことをしていただいております。

14、15、16ページと、今日、御出席いただいております関根委員、それから齋藤委員、大畑委員の活動実績を写真にいたしました。後ほど発言を――ここで一言ずつ、委員長、頂戴してもよろしゅうございますか。

○高橋委員長　はい、結構です。

○小林部長　じゃあ、関根委員、早速ですけども、感想などをお願いできればと思います。

○関根委員　やはり3月6日に行ってまいりました。東日本大震災の被災地ということで、話す内容や、当日、震災のことに触れるか触れないかなど、ちょっとナーバスな部分もあったんですけども、本当に子どもたちは元気で、私もすばらしい経験ができました。

○小林部長　ありがとうございます。

齋藤委員、お願いします。

○齋藤委員　私は、5月に熊本の中学校に行ってまいりました。中学生という多感な年齢で、一緒に盛り上がれるか心配なところではありましたが、みんな元気よく、楽しい時間を一緒に過ごすことができたと思います。

○小林部長　ありがとうございます。

大畑さん、お願いします。

○大畑委員　9月のほうに、千葉県の一宮のほうに行かせてもらいました。そこでフラッグの受け渡しであったり、給食、実技ということだったんですけど、僕が行かせてもらった地域というのが、サーフィンの競技会場の近くにあるということもありまして、非常に、学校自体も、オリンピックに対してであったり、サーフィンという競技が非常に近くて、東浪小学校というところは、プール開きを、サーフィンをしてプール開きをするような、プールの中で競技の人が来て教えてもらったりとか、もうそういうような非常に近いところがあったということもあったので、オリンピックが非常に近かったということで、トークセッションの部分でも、非常に積極的に質問をしてくれる子たちが多かったです。

そして、実技に関しては、やはり場所柄というか、ラグビー自体が競技の地域差が結構あるので、なかなか、ラグビーをしたことがないという子どもたちが多かったんですけど、でも、やはりやっていくと、新しいものに触れることの喜び、そしてできなかったことができた喜びというのが非常に膨らんでいって、スポーツというのは、改めていろんな可能性があるのかなというのを感じました。

そして、今回に関して、僕自身が行かせてもらった地域というのが、あまり僕に対してゆかりのある地域じゃなかったんですよね。場所柄、そして競技としても。そうやって考えると、やっぱりこういった形の、行くようなことがあるならば、ぜひ、ゆかりのある選手であったりとか、競技の活躍をしている第一人者、もしくは、その競技で頑張ってはったOBの方とかというところが行ってもらえれば、さらに内容が濃いものになるんじゃないかなと感じました。

○小林部長　ありがとうございます。

○大畑委員　よろしくお願いします。

○森会長　サーフィンをやればいい。委員会の選び方が悪いんだ。

○大畑委員　僕がもうちょっと頑張ります。

○森会長　世界一の少年がいるじゃない。

○小林部長　すみません。資料に戻らせていただきまして、17ページ、今日は御出席いただいておりませんけれども、バスケットの萩原委員には岩手県の遠野市に、それからレスリングの松永委員には静岡県の伊豆市に、それぞれ御訪問をいただいております。松永委員が訪問された際には、NFにも御協力いただきまして、レスリングマットなども県の協会から運んでいただくなど、連携をして進めております。

それから、18ページは、最近、ただ旗を持っていって交流するというだけではなくて、いろいろな工夫をしようということで、まず、左側ですけれども、マスコット公開投票授業を実施ということで、今隣に座っていらっしゃいます伊藤華英さんにも行っていただいて、マスコット授業をやってまいりました。

伊藤さん、ちょっと、そこを一言。

○伊藤（華）係長　組織委員会としても所属しているんですけど、アスリートとして、立場としても行かせていただいたんですけども、フラッグと連携して、マスコット授業というのをやらせていただいて、大変、子どもたちが私たち以上に勉強してきていると。マスコットの歴史とか、いろんなオリンピックの価値とか、パラリンピックの価値を大変勉強して、この授業に臨まれているなということが感じられて、あと、担任の先生たちがすごくオリンピックの価値というのを教室中に貼っていただいていて、大変感心しましたし、私自身も、授業をしていて、近い存在で一緒に授業をできて、子どもたちがオリンピック選手やパラリンピック選手が近い存在に思ってもらえたというのを実感できたので、何かもう涙が出そうなぐらい歓迎されて、本当にオリンピック・パラリンピックというか、ス

ポーツというのは子どもたちに大変影響があるものだというふうに実感できたので、大変有意義な時間になったなと思いました。

○小林部長　ありがとうございます。

資料の18ページの右側は、「1000」という人文字がございますけれども、ちょうど昨年の10月、オリンピック・パラリンピックの1,000日前のキャンペーンを行っている期間に、鹿児島県の鹿児島市、東京からちょうど約1,000キロメートルぐらいのところというところにちなみまして、「1000」という人文字を児童の皆さんとつくって、メディアの皆さんにアピールをいたしました。

駆け足で続けます。

19ページは、教育認証校ということで、今、「よういー、ドン！スクール」という事業を組織委員会は進めておりますけれども、これと連携いたしまして、まだ、県によっては、残念ながらといいますか、認証校が一つもないという県がこの時点ではございまして、秋田県も、実はその時点では認証校がございませんでした。こういった取組と連携をいたしまして、県内初めての認証校に登録をしていただいて、認証書の授与を行うということで、この学校はもとより、県内の教育委員会のほうにも、いい刺激を与えられたのかなというふうに思っております。また、資料の右側は、JOCが行っておりますオリンピックデーランとも連携をして、北海道の士別で旗を持ってまいりました。

最後、20ページになりますけれども、これからのスケジュールを示させていただいております。これまで約半分弱ぐらいのところを回ってまいりました。まだまだこれから――ちょうど今、長野県と福岡県を回っております。29年度、残りあと四つ、それから、30年度も引き続き進めてまいりますので、アスリート委員の皆さんも、ぜひ、引き続き御協力を賜ればなというふうに思っております。

以上です。

○高橋委員長　ありがとうございます。

この後、不老委員は福岡県で、穴井委員には大分県での御参加をお願いしていただきたいと思いますが、ぜひ、お二人には抱負をお願いしてもよろしいですか。

不老委員、お願いします。

○不老委員　2月2日に、大分の小学校でフラッグツアー、参加するわけでございますが、子どもたちも非常に楽しみにしておるようでございます。ということで、オリンピックの力というのを示したいということで、張り切って、ブースでトークしたいなと思っており

ます。

以上でございます。

○高橋委員長　ありがとうございます。

穴井委員、お願いします。

○穴井委員　大分県の日田市というところで、昨年の夏ですね、水害の被害に遭った地域でございます。そこの中学校のほうに伺うんですけども、そこには、ちょっと、今現在、学校が水害の被害に遭って使えなくなった小学生の生徒が中学校に行って、一緒に授業をやっているという状況だそうです。そのことによって、中学生と小学生を対象にやることになっています。一緒に、陸上競技のパラリンピアンの中西選手と2人で参加するということになっておりますので、何とか盛り上げていけたらなというふうに考えております。

○高橋委員長　ありがとうございます。

先ほど森会長がおっしゃったように、やはり出身の県、またお住まいの近くだとか、競技にゆかりがあるところとか、本当に、皆さん、今のスケジュールがこの後出ておりますので、ここだったらオーケーと日程がもしございましたら、組織委員会のほうまで、ぜひ、お声がけのほうをよろしくお願いいたします。

本当にたくさんの場所で皆さんが御活動していただき、どうもありがとうございます。少し駆け足になってしまいましたけれども、ワーキンググループ1のほうの活動の報告をさせていただきました。

それでは、続いての議題となります。アスリート委員会が関係する大会準備活動となります。こちらはワーキング2ということになりますけれども、こちらは池田委員のほうに御説明をお願いしたいと思います。

池田委員、お願いします。

○池田委員　よろしくお願いします。

ワーキンググループ2の活動報告をさせていただきます。

基本的に、1がエンゲージメントムーブメントということで、どちらかというとプッシュ戦略的な大会に何かイベントをつくったりだとかということが基本的だと思うんですけれども、ワーキング2のグループは、大会のインフラ構築ですね、そちらを基本的に主な活動とさせていただいています。基本的には、各FAでいろんな会議体があると思うんですけれども、その中にACが参画して、いろんな議論を行うと。そういった会議体をワーキング2の基本軸として進めさせていただいています。

では、今からワーキンググループ2の活動報告をさせていただきます。

スタートに、活動報告について1というところからスタートさせていただきます。国立スポーツ科学センターの視察を、2017年7月19日と10月30日の2日間にわたって開催させていただきました。7月19日に関しては、河合さんに参画していただいて、30日に関しては、残念ながら、参画はメンバーとしてはいなかったんですけれども、国立スポーツ科学センターは、皆さん御存じのように、やはりスポーツ選手の強化のハブとして、2001年10月に施設がつくられていて、その後、ナショナルトレーニングセンターがつくられて、双方をうまく活用しながら、日本のスポーツの強化という軸で進んでいったと思うんですけども、やはりその中の10月30日に行われた、飲食を展開されている事業者様に伺いをさせていただいて、非常な、いいフィードバックをいただいたということを聞いております。やはり歴史も非常にありますので、アスリートの食事に関しては、多様なエビデンスをお持ちであると思いますので、そういったことに関して、よいフィードバックをいただいたという御報告を受けております。

では、次に行かせていただきます。

ページをめくっていただいて、ワーキンググループ2の活動報告2というところです。日にちは7月27日からスタートして最後が9月21日に終わる、POTという会議にアスリートが参画させていただきました。特に9月14月のTRA、transport、village、arrival and departure、logisticsという、この四つのところの会議体に対しては、非常にこう、アスリートと非常に密接な関係値があるということで、こちらには関根委員、高橋委員、パラリンピアンのアスリートからは河合さん、田口委員ということで、4名のアスリートが参加をさせていただきました。この中で、議論として大きく出たのが、villageのグループから、食事をどのように提供したらいいんでしょうかということがありまして、食事の内容の成分だったり、カロリーだったり、サイネージだったり、そういったところをどういうふうにアスリートが見ているのかというところで、ディスカッションされたということを聞いております。皆さん、選手村で、オリンピアンとパラリンピアンの方は、少なくとも競技をやられている間は生活していたと思うんですけれども、非常にカロリーを見ているアスリートと、そうではないアスリート、分かれると思うんですけれども、やはり体重制限があるアスリートですね、特に柔道だったり、レスリングだったり、ボクシングだったり、ある程度、そういった体重制限が設けられているようなアスリートに対しては、カロリーの成分表示だったりするのを見やすいところに設置をしていったりだとか、あと、

今回、5,000席を用意しているということで、中で渋滞が起きないように、あとは、やはり競技団体によっては、団体のまま選手村の中の食堂に入る方もいらっしゃるので、そういったスペースがどういうところにあいているのかという、サイネージも含めて、しっかりインフラを構築をしていく必要があるんじゃないかというお話をいただいたというふうに聞いております。また、あとtransportに関しては、ロンドンではオイスター・カードというカードを選手がいただいていて、自由に交通機関を乗るようなことが準備できたと思うんですけども、今回の東京オリンピックでは、ある意味、選手村は晴海という都心の真ん中ですよね、東京の真ん中のほうにアドレスをしているので、銀座だったり、築地だったり、行きやすいアドレスの場所にあるんですけれども、ここから、特に選手村からそういった銀座だったり都心部に向けてバスを提供する必要があるかとかということがここで議論されたというふうに聞いていて、アスリートとしては、公共施設を使いながら、そういった移動は十分できるんじゃないかという話を聞いているので、そういったロンドンのモデルのように、オイスター・カードみたいな形でのものを、公共施設を利用できるようなパス的なものを用意すれば、特にそういったバスの提供だったりする必要はないじゃないでしょうかというお話をいただいています。

次の報告に移らせていただきます。

ページをめくっていただきまして、ワーキンググループ2の活動報告3に移らせていただきます。第1回 NPC Open Days参加というところになります。これはNOC/NPCが基本的に参加して、こちらは晴海にある選手村を視察したというふうに聞いております。オリンピアンからは高倉委員、パラリンピアンからは河合委員、田口委員、この3名が参加をさせていただきました。基本的に、選手の移動のインフラだったり、バスのトランジットだったり、基本的に、選手村の場所を、現場を見ていただいて、気づいたものをNOC/NPCと一緒にディスカッションすると。プラス、今回はオリンピアンの高倉委員も参加していただいたということで、NOC/NPC以外、オリンピアンの選手も含めていろんなディスカッションをされたという、非常に有意義な委員会だった、この機会だったというふうには聞いておりますので、引き続き、こういう機会も提供しながら進めていければいいんじゃないかというふうに思っております。

では、次の報告に移らせていただきます。

ワーキンググループ2の活動報告について4というところです。こちらはNPC Experts Review会議というものを2017年10月24日に開催をいたしました。ここは河合委員にも参加

をしていただいたので、こちらは河合委員から少しフィードバックをいただきたいなというふうに思っております。

○河合副委員長　これはIPCとか過去にパラリンピックを開催したような国とかのエキスパートの方々が集まって話をするという機会で、JPCももちろんですけれども、我々も参加をして、実際のパラリンピック固有の特別に必要となってくるような準備とか、そういったところに対して、さまざまな意見交換をしたということです。

特に、やはり当初から話題になっております日本国内の宿泊問題ですね、ホテルのアクセシビリティの問題と、あとはやっぱり移動に関して、バスや公共交通機関における移動がやっぱりラッシュ時はどうなのかとか、こういう話題について、どういうふうな形で解決に向けていけるのか、最終的に、あと数年――当時ですと3年弱ですけれども――の時期に、どうやってこれから取り組めばいいのかということでのさまざまな意見交換とアドバイスをいただいたという会議になります。

○池田委員　ありがとうございます。

アクセシビリティに関しては、やはりオリンピアン、オリンピックよりかは、やっぱりパラリンピアンのアスリートが、基本的にどういうふうな形で移動手段をとるかというのが、非常に大切な、重要な要素だと思いますので、こういうふうな形で、頻度をさらに上げていきながら、よいフィードバックを今後もとっていきたいなというふうに感じております。

では、次のページに移動します。ワーキンググループ2の活動報告について5という項目です。こちらは、先ほど御紹介したPOTの会議、そしてNPCのExperts Reviewというところから、選手の輸送に関しての打ち合わせを、トランジットグループからもう少し詳しくヒアリングをさせていただきたいという報告を受けましたので、パラリンピアンのアスリートのアクセシビリティということで、田口委員、河合委員を中心に、こちらの会議を進めさせていただきました。写真にもありますように、バスで異動する手段だったり、アクセスブルのバスの台数だったり、どういうふうにパラリンピアンのアスリートが効率よく、そして競技に支障ないように移動手段をとれるかというところが基本的な議論になったというふうにフィードバックを受けています。

こちらは田口委員にちょっとフィードバックをいただきたいな、というふうに思っています。田口委員、よろしくお願いいたします。

○田口委員　ありがとうございます。

今、池田委員がおっしゃったとおり、POT会議の9月14日のときに、かなり深く私たちもお伝えして、ちょっと、じゃあ、そういう相違がないように話し合おうということで、この10月27日に設けられたんですけども、やはりバスの数が、日本にはなかなか車椅子ごと乗れるバスというのがなくて、この写真に写っているリフトつきというのがないんですね。さらに、市バスとかのような、低床バスというんですかね、ああいうバスが高速は走れないとか、そういう法律的な問題もあるようで、じゃあ、一体、2020年、選手が選手村から競技会場にどれだけ効率よく移動できるのかって、何人か、2、3人しか乗れないバスを何万台用意しても、それは何も効率はよくなくて、やっぱりある程度のまとまった人数が乗れるバスが必要ということで、やっぱりそういうのは私たちとか組織委員会だけでなく、国とか東京都とか、全部を巻き込んでいかないと、2020年には間に合わないんじゃないかということも話し合いながら、お互いにいい方向に行けるようなということで話しましたので、ぜひ、今後も、こういうような進捗状況も知りながら、私たちもどんどん意見を言わせていただければなというふうに思いました。

以上です。

○池田委員　ありがとうございます。

やはりこういう会議体から私もいろんなフィードバックをいただいているんですけども、やはり情報としては、なかなか入らないような情報だったり、なかなかバスの台数の制限だったり、バスのこういった乗り降りの、8台分、中を改造してやったらどうかという意見もあったそうですが、なかなか、法整備の問題で、そういったものができないだとかということも、こういう会議体から知ることもできたので、非常に、ワーキンググループ2に関しては、大会の成功に向けていろんな情報が出てくるということで、各ACの皆さん、こういったところで情報を自分たちの知見として入れていただいて、いろんなところでお話しする機会はたくさんあると思いますので、そういったところで、いろんな東京2020のインフラの場面がどういうふうになっているのかというところをですね、ぜひ、子どもたちも含めて、伝える立場としてやっていただきたいなというふうに思っております。

次のページへ行かせていただきます。ワーキンググループ2の活動報告6になります。こちらは成田国際空港第1ターミナルにおいて検証をさせていただきました。出入国の連絡会議におけるユニバーサルデザインに関するグループとパラリンピアンのアスリート4名において、いろんなディスカッションをさせていただきました。こちらは羽田空港と成田空港がオリンピック・パラリンピックの飛行機のハブということでなっていますので、オ

リンピアンよりかは、どちらかというとパラリンピアンのほうが、アクセシビリティ、また到着してからの不便もあると思います。なので、ここから出てきたフィードバックに関しては、やはり遠くから移動してきた――遠方から移動してきたアスリートに関して、パラリンピアンのアスリートに関して、到着したときに、すぐトイレに向けての動線がどのようにつくられていくかとか、視覚障害のアスリートが、上りは比較的自分たちで歩けるんだけれども、なかなか下りがですね、手引きをしてくれる人がいないと、おりることが難しいというフィードバックもここでは受けているので、そういったところも一つのフィードバックのいい材料として、成田国際空港、羽田空港も含めて、いろんな整備をしていかなくちゃいけないんだと思います。

ここでは田口委員も参加していただいたので、少し、またですけど、田口委員、お願いしてもよろしいですか。

○田口委員　そうですね。いろいろな、今、池田委員おっしゃったとおり、いろんな意見も出まして、その中で、やっぱりオリンピック・パラリンピック、両方ともに関することでは、アクティベーションの有効化する場所ですね、かなり狭いんですね。どんどん、またオリンピアン・パラリンピアンだけでなく、選手だけでなく、一般のお客様も来るところなのに、ここでいいのかとか、そこにどういうふうに――どんどんたまってきちゃうと膨大になって、一般のお客様にも迷惑かけるので、そこをどうやって途中でとめたり、少しずつ送るとか、あと、そういうのを待っている選手が、着いたとき、ちょっと緊張しているじゃないですか、そういうときにどういうふうにリラックスさせるかという、そういう仕掛けも大切なんじゃないかというお話とか、あとは、税関エリア、バゲージクレームで荷物をとって、税関チェックをした後に、そこから今度は選手村に向かうバスに乗るまでの動線ですね。よく皆さんも試合から帰ってきたら通られると思うんですけど、ああいう一般のところを通ると、すごい人ですよね。そこを団体のオリンピアン・パラリンピアン、特にパラリンピアンは視覚障害者とか車椅子の人がいますので、そういう人たちがどういうふうにすっと動線を確保していただけるかとか、そういうのもすごく勉強になりました。

また、エレベーター、これから増設はされるらしいんですけども、膨大な量の団体のパラリンピアン、車椅子の選手が来たときに、このエレベーターでどうやってさばけるのかなとか、そういうのも意見をして、エレベーターはそんな簡単にどんどんはつけられないと思うんですけども、そこをどうやって運営の面でクリアにしていくかとか、そういう課

題も出てきましたし、そういうお話も出てきました。

あと、この視察ではないんですけど、たまたま、私、普段、車で移動して、成田に行くのを悩んだんですけど、どうせだったら成田エクスプレスを使ってみようと思って、成田エクスプレスを使って成田へこの日行ったら、思わぬところで成田エクスプレスってバリアフリーじゃないんだなというのを感じまして、そういう面でも、まだまだいっぱいの問題があるということをこの日は感じました。

以上です。

○池田委員　ありがとうございます。

やはり空港に到着してからが東京2020のスタートだと思っていますので、到着してから選手村まで、非常にスムーズに動線がつくれるということは、やはりオリンピック、オリンピアンの選手、パラリンピアンの選手、ストレスなく大会に迎えるということで、最初の障壁としては、非常に重要なところなんじゃないかなというふうには個人的に思っています。

続きまして、ページをめくっていただき、ワーキンググループ2の活動報告7というところに移らせていただきます。こちらは選手村の計画に関するレビューになります。11月20日に、オリンピアン、私、池田と上山委員、そしてパラリンピアンからは河合委員と田口委員が参加させていただきました。

こちらは、選手村はどのように今後計画をして進んでいくかというところを基本的な中心の話題として聞かせていただいて、いろんな私たちから意見が出たんですけれども、私のほうからは、選手村の中でのオープンスペースというのは幾つかあるので、私も2回オリンピックを通して一つ気づいたところが、やはりオリンピック・パラリンピックは、選手中心でなければいけないというのはもちろんなんですけれども、選手村で生活する選手の中で、やはり大会にフォーカスする選手と、大会が終わった後に選手村の中で東京を楽しむだとか、オリンピックを楽しむだとか、二つの層に分かれるんじゃないかというふうには思っています。そういった中で、オープンスペースを使って何かリラックスできるような、選手がくつろげるようなスペースを確保できないかとか、ある一定の期間を住むので、それにストレスなく選手村での過ごし方というのを計画の中に埋め込んでいただきたいということは話させていただきました。

こちらは上山委員も一緒に会議に参加したので、ちょっとフィードバックをいただきたいなと思います。

○上山委員　選手村の計画のところで、少し意見させていただいたのは、今回は宿泊棟ですね、宿泊棟の地下にランドリーを建設するという今お話が出ているんですけれども、その場所は、大会終了後は駐車場になるというところで、空調の設備が全く整えることができないということだったので、その辺りの、やっぱり日本の独特の夏の暑い環境の中で、どれだけ選手が快適にといいますか、洗濯というものは、もう絶対に切っても切れないものなので、そういったところにストレスをかけないように、何か、また対策なり考慮をしていただきたいというお話をさせていただきました。

○池田委員　ありがとうございます。

あと、河合さんからは、選手村のフィードバックをいただくときに、ミニチュアの模型があればすごくわかりやすいみたいなお話もいただいたので、何か立体的に見えるような、選手村の模型みたいのがあれば、選手村のレビューをするときに、動線がどうだとか、ここからはどういう景色が見えるんだとかというのがわかりやすいので、何かそういうのも検討していただければいいなというのも、河合委員からは意見としていただきました。

では、最後になります。ワーキンググループ2の活動報告8ということになります。こちらは今後の活動の予定になります。2月下旬に第4回の国立スポーツ科学センターの視察、スポーツという対象でやらせていただきます。こちら、またACの皆さんにお声がけをさせていただきますので、御都合よろしいアスリート、ぜひ参加していただければ幸甚です。

そして、3月下旬には、NOC Open Daysということでやらせていただきます。こちらもACのアスリート何名か参加できるような方がいらっしゃったら、ぜひ参加をしていただければいいなというふうに思っております。

以上をもちまして、ワーキンググループ2の活動報告を終了させていただきます。ありがとうございます。

○高橋委員長　ありがとうございました。ただいまの説明について御意見、また御質問がある方はいらっしゃるでしょうか。

はい、お願いします。

○森会長　僕から言うのはおかしいんだけど、今日、政府と東京都、芦立さん、それから越さん、それぞれお見えになっている。紹介した、してないでしょ。お二人お見えになっているのにずっと座って聞いているだけじゃしょうがない。これまでの中で多少、都や政府が関与しなきゃならん問題が幾つかあったような気がします。ちょっと御意見があったら聞かせてください。

○芦立臨時委員　とりわけ今、御指摘があった中で言いますと、パラリンピックを視野に入れたときに、ホテルの問題がありますし、それ以外にも、例えば成田エクスプレスが意外にバリアフリーじゃなかったよというお話、それと車両で、バスでアスリートの皆さんを運ぶときに、必ずしも今のバスでは多くの車椅子アスリートの皆さん、輸送することができない。あるいはそれを輸送しようとすると、コストもかかるし、法令上の制約もあるというようなお話など多面的に頂戴したところであります。もちろんさまざまな共生社会に向けて政府として旗を振っていくというのは、これは非常に大きな話です。1月23日、先週にも全ての閣僚をメンバーにするユニバーサルデザイン閣僚会議というのを総理官邸で開きまして、東京2020に向けて、より一層、各省連携していこうというお話をしたところですので、今日いただいたようなお話も個々のお話として非常に大事なポイントだと思って私は伺っておりました。もちろん今すぐに全て解決するというのは難しい部分があるかもしれませんし、それから、バス一つとりましても、民間のバス事業者の財産でもあるわけでして、こういうものを直していくときに、一体誰がやっていけばいいんだというような話から一個一個詰めていかなければならないとすると、今日でパラリンピックまで939日ですかね。この限られた期間の中で政府としてどうしていけばいいか、一個一個考えていく必要があるかなと思っております。もちろんホテルのバリアフリーについては、今回初めて観光庁の予算、今、国会へ提出している補正予算案でホテルのバリアフリーを直接、民間のホテル事業者の方に補助するための補助制度なんかもつくられたところでして、こういうものを活用して進めていきたいと思っておりまして、今日いただいた御意見も、いろんなチャンネルでこれ、私ども内閣官房、政府へぶつけていただければ、それぞれ真摯に対応していきたいと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。

○越臨時委員　東京都の越でございます。いろいろと参考になる御意見ありがとうございます。バスの問題と、それからユニバーサルデザインの問題ということで、さまざま現場を実際に御覧になっていただいての御意見ということで、大もとはやはりインフラ、輸送をどうするかということと、あわせて店舗の問題ですとか、広く課題がございますけれども、一つ一つ、時間は限られておりますけれども、連携しながら取り組んでいきたいと思っております。

また、今日お伺いした話もきちんとそれぞれ所管のほうに伝えまして、また、いろんな形で情報等をこちらからもお伝えできればなというふうに思っております。引き続き、よろしくお願いいたします。

○森会長　ありがとうございました。

○高橋委員長　ありがとうございました。

○森会長　上山さんが言っていた話の中でちょっと小さな話だけど、とても大事なことをおっしゃった、ランドリーの話をされた。今日の新聞だったと思いますが、こんなところで申し上げていいかどうかわかりませんが、法務省、厚生労働省か、村木さん、逮捕されたでしょ。結局無罪でしたけどね。これはその取り調べを受けている間、刑務所へ入っている間の女性の洗濯がもう非常に厳しくて大変だったというふうに書いてあったんですよ。3枚以上のものは洗えないというようなやつ、これは刑務所の中だからね、なんだけど、もう非常にそれがやっぱり女性にとって一番大変な、特に東京の夏の気候を考えると洗濯という問題は大変大事なところだと。これは上山さんの話をされたフィードバックの中で非常に、今朝新聞読んでいてなるほどと思った。これは東京都、国、我々が委員会のことをどう考えるか、テーマとしてちょっと覚えておいてください。

○高橋委員長　ありがとうございました。私も9月14日、POT会議のほうに参加をさせていただきましたけれども、バス輸送の部分というのは、チーム競技はやはりチームで一緒に移動したい。そこの中でもチームワークをしっかりと強くする場面でもあるということと、ほかの、やはり海外では、それができているといった背景もございまして、やはり東京でもそういった形をとっていただきたいというスポーツ関係者の皆様の意見が非常に強かった。もちろんいろんなところの段階を踏んでそこに向かわなければならないとは思うんですけれども、ぜひお願いしたいところではあります。空港移動、選手村、会場、非常に細かいパートに分けて、今、東京に向かって準備が進められております。その中でもアスリートならではの本当に視点というのも非常に大きくこれから関わってくると思いますし、意見があると思うんですね。ぜひ各会場なんかですと、また、競技別にもっと細かく出てくる場合もございますから、今、ワーキンググループ2、池田委員を中心に活動させてもらっていますけれども、ぜひ皆さんも積極的に会議のほうに参加をしていただきまして、そういった御意見をこれからも頂戴していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○中村CFO　ありがとうございました。非常に組織委員会、いわゆるアスリートというかスポーツのことを知っている方が比較的少数でありますので、アスリート委員会のこういった御意見、非常に貴重に思います。他方で、大会1,000日前ということで、森会長も常々おっしゃっていますけれども、スポーツマネジャーということで、各競技ごとにその

スポーツのエキスパートを我々大会準備のところで有効に活用して、知見をいただこうということにしておりますので、ぜひまたそういったアスリート委員会の方とそういうスポーツマネジャーとかとよく意見交換をさせていただきたいと思っておりますし、今日、スポーツ局でずっとスポーツに携わっておられた土方局長代理、ちょっと一言。

○土方局長代理　皆さん、こんにちは。私、土方と申します。昨年の12月1日よりスポーツ局の局長代理を務めています。改めて、どうぞよろしくお願いします。

今、中村さんのほうからお話があったんですけども、私も長年、アスリートの方々とおつき合いをしていましたけども、やっぱりここにいらっしゃる皆様というのは長い間準備をして、練習をして、代表になられた方々だというふうに思っております。そういう方々の気づきというんですかね、感覚はやっぱり一般の方々と大分違うというふうに私は感じておりますので、ぜひ今までの体験であるとか経験の中で、こういう会議であまりお話になってないようなことも含めて、これから忌憚のない御意見を出していただければ、この会がより豊かになるんじゃないのかなと思って、今日初めて参加させていただいたんですけども、改めて感じておりますので、どうぞよろしくお願いします。ありがとうございます。

○森会長　出したら処理をしなきゃいかんですよ。出すだけではなくて。

○高橋委員長　どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、報告事項が続きましたが、ここからは皆さんの意見を頂戴したいと思います。議題3の観客の経験について、事務局からの説明をよろしくお願いいたします。

○井上局長　よろしくお願いいたします。大会準備運営第一局長の井上でございます。委員の皆様方には日ごろからお世話になっておりますことを御礼申し上げます。

本日は、貴重なお時間をいただきまして、アスリートの方々とも非常に関わりの深い観客、特に観客の経験につきまして事務局から御説明させていただくとともに、御意見を頂戴できればと考えております。本日は、私と、担当の左におります山岸観客の経験課長が出席をさせていただいております。よろしくお願いします。

資料3に基づき、31ページからになりますけれども、説明をさせていただきます。観客の経験という言葉、あまり聞き慣れない言葉だと思います。私も組織委員会に2年前に赴任して、初めて観客の経験という言葉を知りました。Spectator Experienceを直訳的に訳していると思いますが、SPXという3文字で略しております。皆様、御案内のように、大会の準備の分野をFA、Functional Areaとして52設定していますが、そのうちの一つのFAを

構成しております。

まず、観客そのものの定義ですが、我々が今、この分野で考えているのは、大会のチケットをお持ちか、あるいはお持ちでないかに関わらず、東京2020に参加する全ての人を想定しています。大会にはアスリートやメディアなど、下に小さく丸で示していますが、八つのステークホルダーが設定されておりますけれども、その中でも人数的には最大規模のグループになるという部分です。参考までに四角のところにも小さく記載していますが、ロンドン大会では、約2,000万人の観客数があったと言われておりますけれども、東京大会においても、同等かそれ以上の観客が東京を訪れるであろうということが予想されています。

33ページ、観客の経験とは?ということで設定しています。観客がオリンピック・パラリンピック競技大会に触れ、参加する中で得られる大会及び開催都市に対する印象でありますとか、記憶でありますとか、思い出としております。そして、これは開催都市及び大会に対する国内の世論でありますとか世界からの評価に影響を及ぼすという観点です。我々、日ごろ、大会の準備をしているわけですが、大会の運営側からの視点だけではなくて、参加者の一連の行動でありますとか経験をされる側、その観点から、その準備というものを見てみようという視点だろうと捉えております。

34ページ、この分野の重要性について触れておりますけれども、アスリート委員の皆様方にはこれまでの御経験から十分御納得いただけるとは思いますけれども、観客はアスリートとともに大会の雰囲気をつくり上げる、ともにつくり上げていく「責任あるプレーヤー」であるということです。

そしてもう一つ、次のページになりますが、観客はSNSや周囲への会話を通じて、大会の物語や経験の語り手を担う「強大な広報」になっていただく方々、（最大規模の情報発信者）であるという観点です。こういう観点は、ロンドン大会辺りから出てきたというふうにも聞いていますが、インターネットの普及でありますとかSNSの拡大ということも影響をしていると思います。今まさに、ますますこの概念が重要視され始めているという状況でございます。

続きまして、36ページの矢印がある表でございますが、観客の方々が実際行動していく時間の移り変わりといいましょうか、工程のことをよくこの分野ではジャーニーと呼んでいますが、その観点を表した図です。観客には大会中だけではなく、大会前から、そして大会後にかけて、さまざまな接点があるということです。そこに、円の中心部分にゾーン

1と書いてありますが、会場内、そして、ゾーン2の会場外でのオリンピック・パラリンピックの体験、それから、宿泊であるとか観光といった、競技の大会には直接関係しないところまでも含めた概念を考えています。

次の37ページに、具体的なそれぞれの観点、接点の観点を例示で列記したものです。御覧のように、さまざまな接点があろうかと思いますけれども、それを時間軸で示しています。まず最初に、情報収集が行われたり、事前イベントへの参加などが今の段階で含まれてこようと思います。冒頭、会長からも御紹介がありました、例えば小学生だとマスコットの投票イベントに参加するというのも、これは大きな意味で一つかと思いますし、メダルプロジェクトのような経験というものもそうかと思います。そしてまた、今後は大会に向けてチケットの購入でありますとか、観戦の準備という段階に移ってこようかと思います。

次のページ、大会の経験のビジョン、基本的な考え方というものを策定をさせていただきました。まず、結論から申しますと、そこに大きな文字で三つ書いてございます。日本らしい伝統と革新、二つ目に気配りと創意工夫、三つ目に全員参加のエネルギー、そのすべてにあふれた、未来への希望となる大会!にということを念頭に置いて我々は考えていこうということです。このビジョンは、組織委員会の内外の方々に集まっていただきまして、さまざまなアイデアを出していただきました。アスリート委員会からは田口委員にもワークショップに参加いただきまして、貴重な御意見をいただきました。ありがとうございます。このビジョンを共通の理解として進んでいければと思っていますが、もう少しブレークダウンしたものが次のページです。

今、さまざまな方々に集まっていただいて、個々のアイデアを出していただいたということをお話をしましが、例えば細長い箱でくくってあるところですけれども、日本の伝統や風習を感じられるですとか、最先端の技術やカルチャーを感じられる。また、細かな気遣いや気配りが、行き届いているなど、大体八つの項目に集約することができました。それをもう少しまとめていき、先ほど最初に申し上げた伝統と革新、気配りと創意工夫、全員参加のエネルギーといった三つの核を設定したという状況です。

次に40ページですが、このビジョンを実現するために幾つかのステップを今予定をしています。土台の部分ですが、一つ目には、ビジョンをまず観客の方々、関係の方々に、共有をして理解をいただくというフェーズ、そして、現在はこれに当たるのかなと思いますが、Japan Standardと呼んでいますが、基本のサービスのレベルを設定し、それをできる

だけ上げていくよう努力をしていくというフェーズ、そして、最終的には、先ほど八つの観点に集約されると申し上げましたが、その関連で、8 Magic Experienceと呼ぶ、何か具体の取組ができないかということを今、組織委員会内でも模索をしているところです。

41ページが、先ほど観客の方々は最大規模の情報発信者であると、一緒に盛り上げていく方々であるということを申し上げましたが、逆にネガティブなことについては、こういうことはどうなっているのだということを感じ、また、発信をされてる方々でもあります。そういった観客の方々が感じられる不都合というものをできるだけ少なくしていくということが必要なのかと考えておりまして、リスクがそこには、大会にはあるだろうということで、幾つか時系列でリスクを挙げさせていただいております。スポーツに対する理解あるいはスポーツ教育に関することでありますとか、情報発信に関することでありますとか、先ほど来もお話に出ました交通網の話、あるいは待ち時間とか待機列が長いという、そこで非常にストレスを感じてしまうということでありますとか、SNSをはじめ、インターネットを活用するためのWi-Fi環境はどうか、あるいは暑さ、ゲリラ豪雨に対する備えはどうかといったような観点をしっかり同時に考えていかないといけないと考えてます。

このような取組をSPXチームで行っているわけですが、本日、貴重なお時間をいただきまして、アスリート委員の皆様方にポイントを具体的に2点に絞って御相談、御意見をいただければということで設定をさせていただきました。42ページ、43ページですが、1点目は、スポーツ教育の促進についてです。特に大会前から観客が好きなスポーツや住んでいる地域に合わせて参加できるイベントの情報でありますとか、競技に関するニュースということを適時、的確に配信する仕組みはつくれないだろうかということ。そして、街中でより多くの人が実際に競技を体験できるようなイベントを継続的に開催できないかということでございます。この点につきまして、過去の御経験でありましたり、日々の御活動の中で感じられるアイデア等をいただければ幸いでございます。

2点目のポイントといたしまして、43ページにある、スポーツ体験についてです。観客のよりよい経験の為に、大会中に会場内外で競技を体験する、競技について学ぶコンテンツの企画をIFでありますとかNF、そして、組織委員会内でいいますとSPT FA、そして、開催都市、東京都とも連携して進めていきたいと考えています。これらにつきまして、さまざまな国際大会に参加された御経験のあられるアスリート委員の皆様方に、印象に残ったコンテンツでありますとか、大会中のスポーツ体験についてのアイデアや御意見がありましたら、ぜひ御教示いただければと思い、今日参った次第でございます。

説明は以上になりますけが、ぜひよろしくお願いを申し上げます。

○高橋委員長　それでは、これからアスリートの皆さんに御意見を頂戴していきたいとは思うんですけれども、ここに書いてあるように、観客はアスリートとともに、大会の雰囲気をつくり盛り上げる「責任あるプレーヤー」ということで、今、観客視点のこういったお話しされましたけれども、皆さんが一番、観客と関わるのは試合の当日、試合の時間というところもありまして、各競技でルールがあるように、非常にこれから東京オリンピック・パラリンピックの興味を物すごく持ってもらっても、やはりそのルールをしっかり知ってもらわなければ、その競技がうまくいかないといった視点であったり、先ほどの井上さんからの話があったように、どうやって子どもたちがこれからオリンピック・パラリンピックを目指して頑張っていくというような、また、地域の人たちがそのオリンピック・パラリンピックに興味を持ってもらうようになっていくのか、今までいろいろな大会と付随してされていたイベント等もあると思いますし、してきた活動もあると思いますので、こういったところがつながる、また、いいと思ったといった経験をぜひお聞かせ願いたいなと思います。

どうでしょう、河合さん。

○河合副委員長　私から、はい。ありがとうございます。私も水泳をやっていたのであれですけども、水泳の応援はわかるんですよね。自分がされたりもしますし、やってきたりも、仲間とかとしているんですけど、実は、ですからほかの競技の、じゃあ応援マナーとかはどうするのが一番いいのか。例えばですけれども、バドミントンの試合に行ったら、何か日本チャチャチャってやっていいのかとか、何か普通に考えたら、そんなことぐらいしか浮かばないんだけど、どこで盛り上がっていいのかとか、それぞれわからない。例えばですけど、アスリート委員の池田委員の説明つきで一緒にマナーを学びながら応援できるような体験とかをつくっていったら盛り上がるんじゃないかと、私も参加したいなと思いますし、そういった各競技のアスリート委員の皆さんとコラボしたものもしながら、最終的には、例えばそういった応援ガイド、アスリート委員会監修みたいなのが何かウエブとかに上がって、皆さんが本当にパフォーマンスを発揮する上で世界共通というか、国際スタンダードな、こういう応援がうまくできるようになっていくと、今から取り組んだらいいのかなということは思いました。

以上です。

○高橋委員長　本当に今言われたように、例えばゴールボールだったり、ゴルフだったり

すると、やはり話してはいけない、静かにしなければいけない、100メートルのスタートもそうですけれども、そういった、やはりルールというものが浸透していない限り、その会場をしっかり集中した場面に持っていくことができない。それは各競技それぞれだと思うんですけれども、私たち自身でもほかの競技を知らないといった部分では、それをいかに皆さんに浸透させていくのかということは、一つ大きなこれから課題だというふうに思います。それを楽しく皆さんに知っていただくようなイベントであったり、企画を練っていただくというものは一つ楽しいのかなという、私も感じはいたしますが、ほかの御意見はどうでしょうか。

はい、じゃあ、池田さん、お願いします。

○池田委員　河合さんから御指名じゃないですけど、例えで出されたので。

先ほど河合さんの意見を聞いてなるほどなと思ったんですけども、やはりお話しするように、いろんな競技が多種目にわたるので、それぞれの競技のマナーってありますよね。そういったものというのが、私たちこういうふうに席並んでほかの競技、穴井さんは柔道ですけれども、やはりそういった観戦マナーというのは、関係値はあるものの大会に行くと観戦マナーって多分わからないと思うんですよね。大会ビジョンでお話をされたように、観客もいい経験を体験するということは、ただ大会を見るだけじゃなくて、やはり観客としてどう一体感を持つかということって非常に大切だなと思っていて、これは1964年の東京オリンピックから日本のスポーツがこれだけのメダルをとるようになったと思うんですけれども、どういうふうにそれに比例して観客のマナーだとか、観客の応援の仕方が、そういうふうに競技レベルと一緒に成長していったのかなというふうに、どうなっているのかなって僕はちょっと疑問に思うんですけれども、競技が成長すればマナーが成長するのか、それとも観戦のこう一体感が同時につくられるのか、何かそれが残念ながら比例するものじゃないのかなと思っているんですよ。なので、やはり東京2020の観戦ガイドみたいなお話を河合さんがされたように、全会場でもこういう応援をしましょうだとか、やはりそういったものの一つビジョンをつくるというのがロールモデルとしては非常に大切なのかなと思うのと、あと、それぞれつくったときに、どういうふうに周知していくのかなというところがあるので、40ページにあるように、イノベーションという言葉があると思うんですけれども、もう今、広告も何も含めてデジタルに移行しているので、デジタルマーケティングのような形で、そういった概念を持って、いろんな方に、若い世代からいろんな方にそういった応援マナーをリーチをしていくというか、届けるというか、周知してい

くような施策も同時に必要だと非常に思っているので、そういったことができれば非常にわかりやすいのかなというのと、最後、39ページに僕は、ダイバーシティという言葉があるんですけれども、これがまさしくオリンピックビジョンの多様性と調和というところで非常にリンクするんじゃないかなと思っていて、やはり子どももお年寄りも障害者も外国人も、やはり応援で一体感が出るとかというところがつくれるというところが新しく日本の応援の文化というか、垣根がない多様性と調和というところで、非常にマッチングするようなところがあると思うので、誰もが、やはりこういう応援をすると、みんな声をそろえて、例えばいい試合には、感動した試合には必ず、必ずとは言わないけれども、席を立って拍手するという、スタンディングオベーションみたいなところも海外では非常にあると思うので、そういった文化を同時に2020年、東京オリンピック・パラリンピックで応援の文化もつくっていくというところが非常に大切なんじゃないかなというふうには感じています。

○高橋委員長　ほかに御意見はないでしょうか。

　じゃあ、萩原さん、お願いします。

○萩原（智）委員　応援という立場の見方ということなんですけど、私、オリンピックで4位だったんですけど、お礼を言う場がその場でなかったんですね。なので、一番初めのアスリート委員会のときにもお話ししたんですけど、表彰式を1位から8位までやってほしいというふうに思っています。これはスポーツの価値を高めるし、観客がすごく応援している選手に対して声援をもう一度送れる場でもあるし、敗れた選手が泣きながらもしかしたら表彰台に立つかもしれないんですけど、それをまた励ます場でもあると思います。それは子どもたちが見て、メダリストもすばらしいんですけども、8位までの選手を表彰することによって、スポーツの価値、選手の価値というのを高められる瞬間になるのかなと思ういます。そういう表彰式のあり方というのも東京から変えられたら、すごくいい世界への発信になると思います。

○高橋委員長　はい。ほかに御意見。

○森会長　3、2、1位がとれない、8位などはだめだというのはIOCの考え方か、それは考えてちゃだめだよ。

○布村副総長　メダルのセレモニーは1、2、3位の方ですけれども、実際は入賞した表彰状は後で選手村でお渡ししているということで、セレモニーとしてはこれまでの大会ではあまりやられてなかったので、もしかしたらやりようがあるのかもしれません。ちょっと

検討して。

○森会長　6位なんですか、8位なんですか。

○布村副総長　8位までです。

○萩原（智）委員　時間の制限ももちろんあるのは私、十分わかっています。8位までの表彰台をつくってくださいとは言わないので、名前だけでもぱっと言って、もうメダルセレモニーへ移るとか、そういう感じがいいのかなと思うんですよね。団体競技の方は試合が終わってすぐにやるので、ほかの団体競技の方はもう敗れた選手たちはまたいないと思うんですけど、ただ、そこにもう一度8位までの選手が来ると、みんなでたたえられる瞬間でもあるので、そういう瞬間があると、観客の皆さんもより盛り上がるんじゃないかなというふうに思います。

○森会長　検討課題。

○高橋委員長　はい。

○布村副総長　その辺はほかの方々も同じような感覚と受け止めてよろしいでしょうか。ちょっと違和感があれば教えていただければ。

○森会長　余計なことするなというのか。

○中村CFO　ついでにいいですか、ついでに。

○高橋委員長　はい、もちろんです。

○中村CFO　大会ビジョンの最初のやつで、全員が自己ベストというのがあるんですよね。何かメダル、勝った負けただけじゃなくて、ベスト記録が出たような人に何かみんなで盛り上げるみたいな、そういうのっていかがですか。

○萩原（智）委員　ただ、ベスト記録、難しいですよね。すごい難しいと思うんです。

○布村副総長　団体戦だと記録がなかったり。

○萩原（智）委員　はい。

○布村副総長　マラソンで30位の人が自己ベスト出したときに、飛び飛びで言っちゃうと、これは難しい話だね。

○高橋委員長　多分、私は、もちろん8位まで、そのやり方にもよると思うんですけれども、例えば陸上だと、メダルセレモニーがあって次100メートル、メダルセレモニーがあって次200というような形でプログラムの中に組み込まれてしまうので、どうしても時間との関係ですね、やはり競技時間の中におさめられなくて、どんどん多く、長くなってしまうというところの時間だと思うんです。なので、表彰という形ではなく、名前だけとい

う形であったり、やり方自体は考えられるのかなとは思います。

　じゃあ、関根さん。

○関根委員　以前だと、多分6位入賞が基準だったと思うんですけど、それがいつの間にか8位になって、国際的には入賞のラインというのは決まっているんですか、常識というか。トップ12という表現。

○高橋委員長　16位もあるじゃないですか。

○関根委員　今は8位が。

○高橋委員長　8位ですね。8位なんですけど、野球とかに関しては、もう6チームしかもともと出ないということもありまして、じゃあ、全員、表彰台に乗るのかといった部分も含めて、なかなか制限もあるのかとは思うところではあります。

　じゃあ、齋藤さん。

○齋藤委員　私はオリンピックのときに自己ベストを出せて、それが自分の中ですごく誇りに思っているところなんですが、なので自己ベストが出たというところに対して何かアクションがあるというのは、選手としてはすごくうれしいところかなというのは思います。例えば時間がとれなかったとしたら、Facebookとかホームページで、この選手が今日ベストを出しましたよというのをお知らせするというのだけであっても誇らしいことになるんじゃないかなというふうに個人的には思います。

○高橋委員長　観客といった部分では二つの事項がありましたけれども、一緒に盛り上げていくような形、スポーツ体験をするといったような形の今までの体験も含めていいと思った意見はございませんか。

　及川さん、お願いします。

○及川委員　車椅子バスケットの及川と申します。よろしくお願いします。

　多分、競技、いろいろなレベルだったり、いろいろな環境だったりあると思うので全然、ちょっと僕、全体的にどうかというのはわからないんですけど、車椅子バスケットで言うと、まさに今、体験会とか、すごい各地域でされていて、多くの子どもたちとか、多くの人たちの認知というのはすごい高まっている中で、知るというところで実は止まっているような気がするんですね。応援に行くというところの動線というのが実はあんまりつながってないと。地域にいる子どもたちが、じゃあ、体験会にやってくれた人たちが実際に試合で頑張っているところを見たいといったときには東京まで来なきゃいけないみたいな。海外とかを見ると、やっぱり簡単にライブストリーミングを行って見られるようになって

いて、今ではFacebookとかを見れば、ライブストリーミングが見られたりとか、そうすると、また事業に反映できたりするんじゃないかなとか思うんですね。やっぱりたくさんの人たち、本当に多くの人たちに知ってもらって、そこで止まっちゃっているという感覚がちょっとあって、そこから応援に来るというところにつなげていくために、全国の人たちが、例えば僕らが合宿に行ったときの手伝ってくれた人たちに応援してもらうために、じゃあ、これ見てくださいみたいなことだったりとか、テレビとかだけではなくて、ライブストリーミングで見られるような環境があると、それも含めて宣伝できるなというふうに思うので、ぜひ御検討いただきたいなというふうに思います。

○高橋委員長　まさに今、及川さんが言われたように、アスリート委員会の企業とのワークショップで体験会をしたその後につなげて、体験の楽しさを今度は応援のほうで一流選手を見て応援するといったような、つなげて考え方を持った企画を考えていることもありまして、この後、皆さんにもそういった提案もさせていただこうと思っていたんですけれども、まさにつながる、点ではなく線でオリンピックまでしっかりつながるような応援、観客というのが必要だと思います。

もう一意見いただいて、多分、皆さん、心に持っているもの、非常にたくさんあると思いますので、アスリート委員のこの委員会の中では田口さんの意見をお聞きして、その後、もう一度この話は、この後のワーキンググループ1のほうでしっかりやらせていただいて、御報告させてもらうような形でも大丈夫でしょうか。

では、田口さん、お願いします。

○田口委員　まず、私、2016年のリオパラリンピックに自分は視察という形で応援等で行ってきたんですけども、すごくやっぱりリオは国民性だと思うんですけども、すごく盛り上がったんですね。車椅子バスケを見させていただいたんですけども、ハーフタイムもずっとみんな踊っていまして、私は、一緒に行った日本人の人なんですけど、彼もハーフタイムずっと踊っていて、ダンスカムみたいなカメラがばっと向いて、ずっとそれに向かって踊り続けていて、終わった後、実際に会場を出たときに周りのブラジルの方とか、いろんな観客の方から、彼はナイスダンシングとか言われて、すごい何かやっぱり一体感もありましたし、そういう思い出にも残るし、ただ、なかなか日本人って、そういうカメラを向けられて踊ったりとか、何かするって難しいので、あと、900何日でいかに日本人を明るくするかみたいな対策が必要なのかなと思うんですけども、そういう意味では、サクラではないですけども、やっぱり会場でそういう盛り上げ方をどんどん教えてもらったり、

できる人とか、あとDJとか、そういうもののすごく大切さというのを感じました。

また、なかなかパラリンピアンの場合、今、いろんなところで体験会とか、試合を見に行くのとかでやってはいるんですけども、まず、選手を知ってもらえてない部分ですね。競技は知っているけど、選手は知らない。オリンピアンだったら、みんな誰とか知っていますよね、桐生選手を知っているとか、外国人もボルトさんを知っていると言いますけども、例えばこの辺りでどこかで外国人のパラリンピアン、誰か知っていますかといって答えられる人っているのかなと思うんですね。そういう意味では、2020年に向けて、やっぱり知っている選手がいて、その人のすごい技を知っていると見ていて楽しいと思いますので、ぜひそういうのは、やっぱり競技、各NFもどんどん発信して、すごさというのを見せていかないと、実際2020年になっても日本人は応援するけども、外国人は応援しないとか、そういう何か寂しいことには絶対なってほしくないと思うんですね。日本人の選手が2016年のリオで、パラリンピックで選手たちが言っていたのが、観客の応援が力になったと言っていたんですね。ぜひ東京でもそういうふうに海外の選手に言ってもらえるような大会にしたいので、そういうものの大切さというのを思います。

あと、すみません、一つなんですけど、私が経験した大会でのスポーツの体験会なんですけども、ロンドンのときは射撃会場とアーチェリー会場が隣同士でしたので、自分が終わった後にアーチェリーのところに行ったら、アーチェリーでは子どもたちがアーチェリーって体験できる場所があったんですね。そこでみんなが近く、1メートルとか2メートルぐらいのところなんですけど、アーチェリーを引いていて、なかなか普段できないことなので、そういう楽しさというのを味わっていましたし、そこはすごい盛り上げがよかったなと思いました。

リオでは、ボッチャの競技会場の外でボッチャのコートがつくってあって、ただちょっと残念だったのが、スタッフの人がただぼっと座っているだけで、その楽しさとかを教えてくれないので、私たちはボッチャを知っているので自分たちで楽しんでいましたけど、やっぱり会場だけでなくて、せっかく会場の外で体験会のブースを出しているんであれば、そこも盛り上げて楽しさとかがわかってもらうということは必要なのではないのかなというふうに思いました。

以上です。

○高橋委員長　ありがとうございます。予定していた4時半を超えてしまいました。大変申し訳ございません。

○井上局長貴重な情報をありがとうございました。引き続き、お願いいたします。

○高橋委員長　この後、引き続き、全て出た意見はそちらのほうにフォードバックさせていただきたいと思います。

それでは、最後に、議題4と5について事務局のほうから説明のほど、よろしくお願いいたします。

○中村CFO　簡単に御説明いたします。45ページから参画プログラムの関係でございます。

最初にお断りすべきでしたが、ちょっと資料、白黒で大変ちょっと見にくいところがあって申し訳ございません。これは、私、ちょっと財務をやっているんですけれども、ちょっとコスト節減ということで、大会運営のためにより多くのあれを回そうということで、カラーではなくて白黒とさせていただいています。申し訳ございません。

46ページから、いろんな参画プログラムについて御説明をさせていただいております。ここにある以外もいろんなイベント、スポーツイベントをやっておりますが、一つは、例えばボッチャです。ボッチャは非常に有名になりまして、経済界協議会の関係では遠藤会長代行にも出ていただいておりましたし、組織委員会の中でも布村副総長が主催して、ちょうどここでやったり、非常にいろんな方がいろんな形でプレーをしていると。非常に皆さん、よく知るところになりまして、ちょっとボッチャのこの盛り上がりについて、後ほど、廣瀬委員から一言、お言葉をいただけると非常にありがたく思います。

あとはちょっとざっと飛ばしていただきまして、70ページから開・閉会式の議論、資料がございます。71ページに基本コンセプトということでございますが、アスリート委員の方々にもいろいろ御意見をいただきました。この有識者懇談会でも、パラリンピアンの大日方さんとオリンピアンの三宅さんに入っていただいておりますけれども、71ページの一番下のところで、そのコンセプトを主なところで八つございますけれども、その6番目といたしまして、アスリートということで、スポーツの祭典として、主役のアスリートが安心して参加できるような式典を目指すと。空間的、時間的にもコンパクトな式典運営を心がけるというところをまとめております。これを踏まえまして、年末から具体的なプランニングに入っているところでございます。

あとは、最後でございます、80ページですけれども、冒頭、森会長からもお話しいただきましたが、平昌のオリンピックの聖火リレーで、まさに平昌から東京へということで、及川委員に聖火リレーとして参加をいただくということでございます。現在、まだ詳細は調整中ということでございますけれども、及川委員にも一言、意気込みをいただければと

思います。よろしくお願いします。

○高橋委員長　では、まず廣瀬さん、今のボッチャの盛り上がりについて、まずよろしくお願いします。

○廣瀬委員　ボッチャの廣瀬です。お陰様でボッチャもいろんなところで、組織委員会さんやいろんな企業さんとかで、いろんなところでボッチャが本当に盛り上がっているというのを本当に耳で聞きまして、本当にうれしく思っています。本当2日前ですかね、本当はボッチャという競技は障害を持っている私たちしか出られないんですけども、今、日本ボッチャ協会とかのほうで、健常者もやれる大会はないかというので、昨年ぐらいから、私たちボッチャの日本代表と、あと企業さん、そして、障害を持っている特別支援学校とか、行っている特別支援学校はボッチャ甲子園というのもやっていまして、そこで優勝したところがそこに参加できるというので、東京カップ、2日前、土曜日で開催しまして、オリンピアン、パラリンピアンチームとか、そこには田口委員も参加いただきまして、いろんな東京都さんだったりとか、本当に健常者、そして障害者、そしてオリンピアン、パラリンピアンの本当に競技の幅を越えて、ボッチャの魅力といいますか、奥深さというのを本当にいろんなところでうれしく思っています。今、協会のほうでもボッチャキャラバンといって、全国いろいろ、全国を回れればいいんですけど、私も一人しかいないので、回れる範囲でしか回れないんですけども、ボッチャキャラバンでいろんなところの特別支援学校、障害を持っている方が通っている学校だったりとか、あと普通学校も回って、ボッチャの体験会もそうですけども、あと、自分たちがやっている練習をあえて公開して、どういう技術があるとか、どういうふうに教えたりとかいうので結構、本当に盛んにやっていますので、これをまだ2020まで、1,000日を切ったので、これをなくさずに2020年、そして、2020年以降もつながるようにこれからもやっていきたいなと思っております。

○高橋委員長　ありがとうございます。

　それでは、聖火ランナーとして出場される及川様、よろしくお願いします。

○及川委員　まずは本当に貴重な機会をいただきまして、本当に感謝していますし、光栄です。開会式の前日ということで、かなり盛り上がった中で聖火リレーができるということで、オリンピックの開会式なので、パラリンピックを忘れずにということで、パラリンピックのほうも含めて、何か貢献できたらいいなというふうに思っています。また、東京につながるようにということですが、東京を盛り上げるために何かできるかといったら、僕が盛り上がってないといけないと思うので、僕自身が、もちろん車椅子バスケットでは

男子代表のヘッドコーチとして東京に向かっているわけですけども、緊張ばっかりせずに、盛り上がるほうも頑張って、まず平昌でしっかり聖火ランナーを務めてきたいなというふうに思っています。よろしくお願いします。

○高橋委員長　頑張ってください。楽しみにしております。よろしいでしょうか。はい。

それでは、本当に駆け足で進めさせていただきました、今年度、今年初めのアスリート委員会ですけれども、皆さん、どうもありがとうございました。

それでは、最後に遠藤会長代行から一言お願いしてもよろしいでしょうか。

○遠藤会長代行　皆さん、大変今日はありがとうございました。改めて、一昨年の秋から会長代行を務めております、遠藤利明といいます。

私は昔、ラグビーをやっておりましたので、今日、皆さんの話を聞いて、同じ仲間意識ができたなと思うのと同時に、やっぱりオリンピックに出たり、いろんな世界的な大会で活躍されている皆さんの認識の違いといいますか、いろいろ超えて、努力をされてこられたんだなと改めて敬意を表したいと思います。特に、萩原さんの1位から8位まで表彰を考えるだとか、自己ベストは何とかというのは、今までの既成概念を超えたというか、どうしても我々はIOCから言われた形を継承してということですが、何も東京でやるのが、全部そのとおりやらなきゃならないという理屈はないので、可能な限り、これはもちろん簡単ではありませんが、少しでも東京オリンピック・パラリンピックは東京らしいものをどうやって出していくかということは我々としても十分考えていく必要があるのかなと思っています。

もう一つ、それが結果的には、やっぱりいろいろな大会の準備とか、あるいはレガシー等ありますが、結果的にはアスリートの大会ですから、やっぱり今日おいでの皆さん方の意見、考え方をしっかり盛り込んでいく必要があるかなと思っています。

いろんな会合に行きますと、会合というか、こういうスポーツの会合、もちろんオリンピックもそうですが、森会長や私が行っても全然沸かないんですが、皆さんが行ってくれると全然雰囲気が変わると。それだけスポーツの持つ力、あるいはアスリートの皆さんが持つ力は大変大きなと思っております。東京だけではなくて日本全体の、やはり日本オリンピック・パラリンピックにするためには、なおさら皆さん方の力が必要でありますし、また、皆さん方のこれまでの経験を生かしていくという意味でも、このアスリート委員会の皆さんの役割は大変大きいと思っております。実は、去年まであんまりこういう委員会に出席しなかったんですが、去年10月に選挙が終わりましたので、森会長から、おまえは

今度選挙ないだろうから毎日来いと言われていますから、できるだけこういう会に参加させていただいて、そして、私、アスリートの仲間として一緒になって2020年の大会を盛り上げていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。今日はどうもありがとうございました。

○高橋委員長　遠藤会長代行、どうもありがとうございました。私もですけれども、アスリート委員の皆さん、気が引き締まる、そんなお言葉を頂戴できたかなというふうに思います。

それでは、最後に事務局のほうから事務連絡のほど、よろしくお願いいたします。

○朝香部長　皆様、どうもありがとうございました。4点ほど追加させていただきます。本日の追加の御意見につきましては、後ほど、またいただければと思っております。この後、またワーキンググループありますけれども、もし追加の意見がありましたら後ほどいただければと存じます。

あと、資料や議事録の公開につきましては、ホームページのほうで公開いたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

次回の委員会開催につきましては、別途御連絡させていただきます。

プレスブリーフィングにつきましては、本日はプレスへのブリーフィングは行いません。

以上でございます。どうぞよろしくお願いします。

○高橋委員長　それでは、皆さん、どうもありがとうございました。第9回アスリート委員会、これにて終了させていただきます。どうもありがとうございました。